

39

戦前の雑誌『医道』について

渡辺 浩二, 小曾戸 洋, 星野 卓之, 天野 陽介, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所

はじめに

雑誌『医道』は浅田宗伯門人木村博昭（以下木村）が代表、元学習院教授原田稔甫（以下原田）が主幹になり昭和4年5月に創刊、昭和14年5月116号を以て終刊を迎えた雑誌である。明治漢方存続運動終焉後、漢方関係機関誌としては東洋医道会の『皇漢医界』の次に創刊。漢方は木村及びその門人ら、本草学は白井光太郎・岡不崩ら、鍼灸は久米崑らの記事が占めた。その内容により浅田流漢方の伝統が昭和初期まで受け継がれていたのを知ることが出来る。また執筆陣が講師となり附属講習所を開設した。しかし同じく昭和初期に出版された湯本求真門人らによる『古医道』や、漢方全派閥が関与した『漢方と漢薬』のように復刻されておらず世に知られていない。今回北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究所所蔵の『医道』を紹介する所以である。

『医道』発行の経緯

原田は浅田宗伯に会見してより漢方に精進し、宗伯没後は嗣子恭悦を信頼した。明治41年息子の病に就いて恭悦より木村を紹介され、以来漢方を広めるために共に邁進した。原田と木村は昭和3年2月に南拜山らとともに東洋医道会を結成し『皇漢医界』を創刊するも、意見の相違あり脱会。昭和3年5月皇漢医道会を発足。その趣意書には「皇漢洋三医界を統一して其の精華を発揮し、宏遠なる大日本医道を樹立せんとする」とある。昭和4年5月1日機関誌として『医道』を創刊。

『医道』創刊から終刊まで

『医道』の財政は木村の援助がその3分の2を占めた。従って木村が没する3巻4号までを第一期、木村家からの援助が途絶えた5巻第12号までを第二期、発行所を医道社に移し嗣子長久が長期連載になる勿誤薬室方函并口訣略解の終了する8巻12号までを第三期、終刊までを第四期として漢方記事を中心に概観する。

第一期：医師は浅田門人あるいは木村門人（以下濟世塾）が占め、創刊より『傷寒論講義』の連載開始。浅田流の伝統として中西深齋の『傷寒論弁正』『傷寒論弁正凡例』が読み下され治験例も同時に掲載。『傷寒論』の訓読は総ルビ付きで素読に便利であったと思われる。全体的な構成は、口絵・論説・研究・治験・雑録・講座（連載）が並び、本草学や鍼灸に関する連載もあり、附属講習所を意識してか教育的であった。毎号40頁から多いときで50頁になった。昭和6年、第一回附属講習所修了生〔安西安周、高橋半栄（道史）、木村長久、小出寿、田口穂次郎〕が出た。昭和6年4月23日木村博昭没66歳。

第二期：木村より月二百円の援助を受けていたが、没後より百円、五十円、二十円となり、6巻より援助無く発行所を医道社とした。執筆陣は濟世塾が大勢を占め、財政を反映してか頁数は40頁（4巻）から30頁（5巻）へ減少した。昭和8年5月、第二回附属講習所修了生〔那須（長谷川）彌人、高橋順益、堀内慶三郎、平堀藤吉〕が出た。財政援助打ち切りに関しては、次の3点が関与していると思われる。木村没後3年が経過、昭和9年5月より『漢方と漢薬』発行（『医道』の医系執筆者が多く投稿）、『傷寒論講義』連載が5巻11号で終了。

第三期：薬系の投稿と転載記事が増え、頁数は30頁（6巻）から20頁（7、8巻）へと減少した。濟世塾からは木村長久、石井就三が連載を続けるのみ。8巻12号を以て木村長久の連載が終了。

第四期：9巻より多大な借財による財政上の理由を以て毎号10頁で発行。その後、発刊以来の印刷所主人が死去、また編集人たる原田稔甫も病を患い、昭和14年5月31日10巻5号（116号）を以て終刊。原田稔甫、昭和15年6月3日没77歳。

まとめ

皇漢医道会機関誌『医道』を紹介した。浅田流漢方を伝えた木村博昭、濟世塾の機関誌ともいえる雑誌である。原田稔甫と木村博昭の浅田門下生二人と共に歩み、その精神は講習所出身者により平成まで伝えられている。